

創立記念月間3週目を迎えました。雪も溶けて、春が近いと感じられます。ケズイック京都大会も、今年は久しぶりに開催されます。新しい季節のはじまりです。

ペトロの失敗

どうして、このエピソードを私たちは知っているのでしょうか。ペトロ自身が、このことを証したからに違いありません。世間では一般的に「自分の失敗は大きな声で話すな」と言われます。見下されたり、つけ込まれたりするようになるからです。しかし、立派なクリスチャンであればあるほど、彼らは自らの失敗を、語ります。それは、それでしか語れない大切なことがあるからです。モーセも、ダビデも、現代の伝道者たちもそうです。ペトロが、黙っていなかったことは、私たちへの愛なのです。

このペトロの姿は、本当に中途半端です。「遠く離れて従った」とある通りです。教室で、後ろの方で溜まっているグループに似ています。参加していると言えそう。でも、自分は彼らと同じと思われたくない、という心理です。傍観者であり、自発的な告白はありません。彼らを待ち受けるのは、仲間はずれにされる恐怖、生き残るために裏切る後悔です。

私たちの信仰は、実はペトロと同じことを誰もが通ります。礼拝に出てもすぐに帰れる後ろの席に座り、聖会に出ても招きの座に進まず残り、神学生になっても奉仕を避け、献身しても証しの機会を逃げ続けます。そのたびに、自分は劣等生だ、クリスチャンになるんじゃない、と後悔します。その通り、かもしれません。見下されても、責められても、仕方のない恥ずかしい姿なのですから。ただ、一つ理解できないことがあります。それならば、なぜペトロはこの証しを語ったのでしょうか。彼が天国に行くために、この秘密を手放した真理は何でしょう。

主の許しと愛

もしも、イエス様が振り向かなければ、目と目が合わなければ、これほどペトロは責めを心に感じなかったでしょう。その眼差しが、同情に満ちていたので、そこに、許しと愛があることを知ってしまったのでした。教会は「弱さの中こそ、強さがある」と繰り返し語ります。神の愛が私を作り変えるから、という信仰がその源です。

礼拝の最前列に喜んで連なり、きよめの恵みにあずかり、奉仕の中に用いられる感謝を見出し、迫害されることを光栄とする変化が起こります。こんな、取るに足らない者で、クリスチャンでない人にも劣る人間なのに、誰よりも、私は神様の愛を知っていると体験したからです。ペトロは、鶏が鳴くたびに、胸が裂かれる思いだったでしょう。しかし、その傷口に、優しい天国の癒しが触れたことでしょう。それを聖霊の満たしと言います。ペトロの証しに、応答しましょう。彼は、この喜びに、一人で多くの人と与って欲しいと願って、この体験を語ってくださったのですから。